

第14回地域医療貢献奨励賞 受賞者（2020年度）

<敬称略>

佐藤 元美	岩手県 一関市国民健康保険藤沢病院・一関市病院事業管理者
<p>昭和54年自治医科大学卒。約13年間にわたり医師不足が深刻な沿岸地域において地域医療の確保に尽力するなど、過疎、山村地域の医療に32年以上従事した。藤沢町国民健康保険藤沢診療所長に着任した平成4年から、当時まだ一般的ではなかった医療、介護、福祉の連携による体制整備を先駆的に進め、地域包括医療・ケアの実現を目指した病院の開設準備に尽力、平成5年に国民健康保険藤沢町民病院の開設時院長に着任した。院長着任後は、病院管理者として病院機能の充実、地域医療の確保、患者サービスの向上に努め、地域包括ケアシステムの確立に尽力したほか、住民が病院関係者と直接対話する「地域ナイトスクール」を定期的で開催することにより住民の地域医療への理解の促進を図っている。地域包括ケアの実践と住民との対話により良好な経営を続け、平成17年には「自治体立優良病院表彰」を受賞するなど、地域住民に信頼される病院づくりを進め、永らく地域医療を牽引してきた功績は誠に顕著であり、住民の安心と命を守るための取組みの姿勢には、多くの住民から感謝と信頼の念を寄せられている。</p>	
高橋 一二三	山形県 白鷹町立病院・管理者
<p>昭和58年自治医科大学卒。昭和63年に白鷹町立病院内科医長として着任後、同病院副院長、院長、事業管理者を歴任し、通算29年の永きにわたり特別豪雪地帯の同町において、地域住民に信頼と安心を与える医療の提供に尽力してきた。外来診療・入院診療に加え、平成7年に訪問診療、平成9年に訪問看護事業を開始するなど地域医療の充実を図るとともに、平成13年には同町健康福祉センター長に着任、地域包括ケアシステムの先駆けとなる医療と福祉の連携体制の構築にも寄与した。また、小規模病院としては先駆的に医療IT化を進め、電子カルテを導入して経営効率化に尽力したほか、人間ドックなど予防事業も推進し、受診者全員への栄養指導を実施するなど地域住民の生活習慣病の予防、疾病の早期発見にも努めてきた。更に今般の新型コロナウイルス感染症拡大においては、帰国者接触者外来としての協力、発熱外来の設置など公衆衛生面でも尽力している。地域医療の確保のみならず、住民の健康維持・福祉の充実に長年にわたり貢献した功績は極めて大きいものがある。</p>	

藤森 勝也	新潟県 あがの市民病院・院長
<p>昭和60年自治医科大学卒。県立妙高病院、県立柿崎病院など特別豪雪地帯のへき地病院を歴任した後、平成19年に県立柿崎病院の院長に着任、継続して地域包括医療ケアを推進してきた。県立柿崎病院では全職員による「いきいき健康講座」や「地域の医療を考える会」などの開催に加え、院外薬局との協力による「お薬相談会」、地域老人会との連携による出前健康講座、地元中学校での禁煙・禁薬物教育など地域組織と協働も図り、地域ぐるみで医療の底上げを目指す取り組みを行った。平成29年にあがの市民病院の院長に着任後は、「医療資源が乏しい地域で、健康寿命日本一を目指す」を目標に、地元自治体と協力して「自助」に力を入れ、糖尿病教室や出前健康講座などを開催するほか、近隣の医療施設との医療機器の共同利用、在宅療養後方支援病院のシステム化、介護施設との連携の会設立による顔の見える関係性作りなどを進めている。また、学会誌へ報告を行うなど、特に咳嗽(がいそう。一般的に言うところの“せき”)の臨床的研究にも積極的に取り組み、臨床に基づいた学術活動やアレルギー学の啓発・普及にも尽力している。永きにわたり地域医療の一翼を担ってきたことに加え、地域医療の本質である全職員による「地域とのかかわり」を重視し、「地域を治し、支える医療」を構築してきたことは、地元新聞をはじめ地域からも高く評価されている。</p>	
丸山 敦	山梨県 身延山病院・院長
<p>昭和54年自治医科大学卒。昭和56年に身延山病院に着任、約40年間にわたり、山梨県南部の山間地域に位置する同病院において、外科医として地域医療に携わってきた。身延山病院に着任するきっかけは、同病院の医師が不在となったことにより急遽、派遣が決定したことによるものであったが、当時、報道機関から医療砂漠と表現された同地域において一人で診療を開始し、昼夜を問わず精力的に医療活動を行ってきた。医療機関や医師の数が他の医療圏に比べ最も少ない状況にある中、同病院の副院長、院長を歴任、自らの伝手を頼りに少しずつ仲間を募り、現在は、常勤医9名、非常勤医20名の医療体制を確立している。また、へき地における持続的で切れ目ない診療を継続するため、隣接する町の医療センターとの連携強化を図るなど医療連携体制の推進にも力を尽くし、外科専門医、指導医として後進の育成を図るなど、その実直な仕事ぶりから、病院職員はもちろん、地域住民から広く信頼を得ている。40年以上の永きにわたり地域における医療の確保と向上に努めてきたその功績は、誠に顕著である。</p>	
大嶋 仙哉	和歌山県 みなべ町立高城診療所・院長
<p>昭和40年大阪大学卒。大阪大学医学部第一外科、社会保険紀南総合病院外科などを経て平成元年に紀南総合病院副院長に着任。平成4年、終戦後間もない頃から高城診療所でのへき地医療に尽力していた父に代わり、地域住民の強い要望で同診療所の院長に就任した。高城診療所は、みなべ町中心部から約10km離れた所に位置し、住民の医療及び健康管理を一手に担っている地域にとって欠かせない診療所であるが、同氏は院長として着任以来、28年以上の永きにわたり昼夜を問わず診療所での治療や往診に奔走、地域住民の健康な暮らしを守るために全身全霊でへき地医療に取り組んできた。また、診療活動の傍らには、保育所、特別養護老人ホームの嘱託医、学校医として住民の健康管理にも尽力し、地元県知事からも保健福祉の功労者として表彰を受けるなど、その地域住民の暮らしに寄り添った医療活動は、地域住民にとって安心感をもって自らの健康管理を託せるものとなっている。高城診療所をはじめ、へき地診療に38年以上従事し、地域医療の確保と住民の健康福祉へ果たした貢献は極めて大きいものがある。</p>	

佐藤 立行

熊本県 佐藤医院・院長

昭和25年熊本医科大学卒。昭和28年に国立戸馳療養所に内科医師として着任。以来67年の永きにわたり、八代海に位置する戸馳島の医療に貢献した。国立戸馳療養所に着任後は、同療養所内科医長、副所長、国立療養所三角病院副院長を歴任し、昭和60年には戸馳島の無医地区に開業、その間一貫して真摯な態度で地域医療に従事し、住民の医療・保健・福祉の向上に努めた。また、平成元年から現在に至るまで小中学校の校医として生徒の健康管理及び学校保健会の活動に尽力、学校保健の推進に努めるほか、昭和60年から平成13年まで三角町教育委員会の委員、委員長を歴任、その間、小規模校の教育向上効果を考慮した小中学校の統合を進め、地方教育行政に対する功労で文部科学大臣賞を受賞するなど医療分野以外でも地域社会に大きな貢献をしている。地域の医師会でも平成8年から平成30年の間、裁定委員や理事を歴任、医道の高揚と親睦融和に努めて医師の資質の向上を図るなど、永きにわたり地域の医療・保健・福祉の向上に努めた功績は極めて大きい。